

第 I 部 マルクスの体系

- (1) 歴史の経済的解釈
- (2) 経済学者 マルクス
- (3) オストロ・マルキストなど
- (4) その他 雑録

(1) 歴史の経済的解釈

摘要

自己推進する経済機構の存在、それは経済的諸過程を変え、自身の生産諸条件を変えていくが、その傍ら上部構造にも変化を強いる如きやり方で作動し、更にはそれらに内在する諸々の必要に即し次なる段階乃至は体制を——単に自らの作動によるだけで——つくり出すといったように自らを変えていく。マルクス風の社会動態論、いくつかの基礎的な原則の光の下に、人間存在の諸紛争と諸浮沈についての構成を成功裡に与えるものであるかのようなものである。しかしその儘のものである限り真実から離れている。それにも拘わらず、弁護され得ない部分が削除されたとしてさえ、その土台部分は多分に残されている。その中には、資本主義の古い構造が立ち去り、次なる段階の新しいパターンへの変換があり、次から次へと、最後には社会主義に向かう、という多くの局面がふくまれている。・・・その他
(編者)

第 I 部 マルクスの体系

I—(1)—1～19

歴史の経済的解釈

1 社会生活——経済的な歴史の把握。・・・そこにブルジョワジーとしてのマルクスがある。

シュムペーターの歴史の経済的解釈は本書を貫く彼のヴィジョンであり、第Ⅱ～Ⅴ部の集約・総括はこれによっている。そのオリジナルとしてマルクスの唯物論的解釈(**the materialistic interpretation of history**)をおく。但しマルクスの哲学はヘーゲルのそれより唯物的ではないし、その歴史の理論は歴史過程を経験科学の要請のもとに考慮しようとするどんな他の試みよりも更に唯物的だとは言えない、形而上学的乃至は中世神学的な色彩すらもつ、とする。それにも拘わらず、第Ⅰ部にマルクスの教義をおき、全篇をその見直し——超克的発展——の装いを持たせたのは歴史の経済的解釈の故であろう。シュムペーターはこれを2つの命題に縮約する。

(1) 生産の諸形態と諸条件が帰するところ諸態度と諸行動、それにその文明を育む社会構造の基本的決定因子である。

(2) 生産の諸形態そのものがそれら自身の論理をもっており、それらはそれらに内在する不可避性に従って——それら自身の働きによるだけでそれらの後継諸形態を生み出すといった如くに——変化する。

第1命題は下部構造の上部構造規定の決定論であるが、シュムペーターはそれよりも第2命題の方を重視する。経済発展の展開過程とその結果もたらされる社会学的組織構造の変化——新機軸と選抜・淘汰(**innovation and selection**)の結果として——についての命題である。(以上・・・編者)

2 語るに勝る！ 見よ、眼に浮かべよ。

3 我々は目に浮かべる(**visualize**)ことを試みなければならない。あるいは

は再び戻って精神に対しても。・・・差、差当たってはこの作用とその変化を解明する。・・・

何を選ぶのか？・・・経済的解釈にまで遡り、そして分析をそれに役立たしめる。・・・ifを持ち込むこと、但しそれには制度的にのみ。・・・全くオリジナルではない。・・・

経済学(者達)はそれをなさない。彼等がなすのは生起したことの検討である。それがゴールというだけならば、問題はない、だがそれでは一個の理論たりえない。・・・

しかし誤った階級理論、誤ったヴィジョンは全てを墮落させる。社会主義は予見され得るのか？ そうではない。・・・犯罪的ではない。歴史家のように。・・・

判断することは難しい、欠点を改善することも難しい。・・・すぐさま了解された、留保のことすらをも、・・・あらゆる段階は歴史的に考察される。

4 全ての社会的状態は次なる状態を「それら自身の枠組みの産出として」生み出す。・・・保守することもありそうである。・・・私の社会主義判断は、これまた経済的な歴史の把握に即している。・・・ヴィジョンを。

5 経済的な歴史解釈について尚考察を進めることになろう、恐らくは。・・・手押し粉ひき機・・・イデオロギーは蒸気でも煙でもないことを尚できる限り述べるだろう。・・・不可避性の論証・・・ランゲとスウィーヂイ！・・・

そこで階級！・・・歴史の階級闘争把握はそれほど悪くはない、私がそれを告げねばならないほどには！・・・そして「諸事実(与件)」・・・

ブルジョワジー国家は自由貿易を採った。

6 自らの推進力を必要としないプロペラ。・・・経済的な歴史把握は主要な体躯を全てが不可避なものとする行論のなかにある、とすでに述べた。そしてこのアスペクトは尚受け入れられる！

人間存在は、何故に彼等は闘うか、を示している。・・・社会主義公共機関(Gemeinwesen)の計画、社会主義的政策・・・

7 階級理論を欠く——マルクスとヘーゲル、倫理的唯物論を欠く——ベルンスタインとエンゲルス、我々が立ち入るべきことでもない。

ブルジョワ的なもの・・・社会的 — 経済的範疇としての資本・・・価値は単純に価値である。・・・機械的な蓄積・・・会計は貨幣の作用の中の社会主義的要点であるのかも。・・・オリジナリティがある。・・・

イデオロギーとしての心理学に対する留意・・・社会科学・・・経済学一心の訓練

8 マルクス——心理学への留意・・・見かけの背後にある把握・・・イギリス史・・・諸階級と生産形態・・・その限りでそれは歴史的である。

挿入、ウェーバーとフォイエルバッハ・・・特殊的で経済的範疇を備えた諸階級・・・

剰余価値——ロードベルタス・・・それにエンゲルスも・・・社会的で経済的な範疇・・・

9 マルクスの魅力ある説明構成の成功は、直接的で且つ深いものがあつた。人間存在の争いと浮沈がいくつかの基本的諸原理の光の下で秩序だて

られるのである。もっとも身近なところにある諸々の秘密、歴史の最深の意味、それが赤裸々にそこにおかれているようにみられた。とりわけ、筆舌に尽くし難い退屈の経験に由来して嫌悪された経済理論の乾ききった骨組みや象牙の塔に奉仕し尽くす歴史家達のそれに劣らず乾いた骨組みから、突如として、秩序だった「死の勝利」(“trionfo del morte”)の下に燦々と輝く遙かなる頂上へと動いているところの実生活に至りつつあることを見出した、と啓発された若者の熱狂に我々は気付くであろう。今や自分達は日々の政治の操り人形達を見透かしており、事物の核心——灰色の頭を振って「それはそうではない」と論じることで軽侮を買っているだけのあらゆる職業的権威達によっては否定されるものではあったが——を了解している者として認められた、と感じたのである。

10 更にはるかに重要なのは、マルクスが社会的研究についての一つの新しい目標と一つの新しい方法に貢献したことである。経済生活の歴史過程の理論の可能性を洞察し、しかも歴史的パターンの現実のバラエティを解釈する用具として、理論に必要なあらゆる概念と命題を探求した。一般化——通常は命題なるものは一般化が行われるほど、もたらされる内容が損なわれるのであるが——によって特定の事実の何をも失うことのない「真実についての強度に一般的な思考装置の極限」——この中へはヘーゲリアン的な何物かがあることは疑いない——を探求した。彼は一般化が中味を損なうという必然性を否定し、しかも引き続いてその否定に驚くべき程度における成功をもたらした。そこでは経済の進化を分析するため彼以前になされた試みの全てが、彼の成功と比較される時、無意味なものに転落したのである。諸々の古典もまた歴史的諸背景を描きはしたが、資本主義過程の叙述とは程遠かった。古典の作家達はまた自分達が見出したものに外挿を試み、その上で一定に保たれている自然的諸資源と結合する資本と人口の増加といった要素から変化の構図を発展させようと試みた。しかしこれは、かの壮大なマルクスの社会動態についての概念に追加するものは何もないという程のものであった。マルクスの概念は、たとえそれを以て解明しようとしたあらゆる諸方法、諸原則、諸結果が誤ったものであったとしても、その価値を保つものであった。

1 1 並びに多くの(若者と)同じ弁解をなしえない知識人達がある。彼等は単純に出来の悪さの故に権力への志向同様、分析への志向からも永久に排除されており、それについて(若者と)同じ道を感じる。だがこうした背後には一層重大で、しかも本質的であるような何物かがある。近代的分析が——理論的分析であれ、歴史的または統計的分析であれ——マルクスの行論と相対する時は、後者(マルクスの行論)が打ち負かされることは確かである。芸術家の場合、最高の業績に登りつめたならば、その業績は数世紀に渡って重要性を保持するという特権がある。科学の場合そうではない。我々経済学徒は我々が進歩させた程度の業績で悦に入っている根拠はほとんどない。それにもかかわらず進歩に取り組んでいかなければならず、しかも時から時へと時の流れに由来して蒙るところのあらゆる挫折に抗して我々は前へ動くのである。とりわけその過程で理論分析のテクニックを作り上げてきた。この用具にはマルクス主義者は競争し得ない、しかしその一方でそれを作り上げるコストの中には専門化、無味乾燥、それに盲従があるのである。我々は以前の世代の人々が成し遂げたよりも遥かに満足のできる様々の貨幣的、非貨幣的メカニズムの詳細を提示することができる。しかし理論は、その過程で今まであった赤々と燃えている関連物を失う。このことは避け得ないことであり、他の科学が時代遅れとなるや崩れ落ちてしまうのと比較すれば、悪い運命にあるのではない。とは言え、マルクスが自ら課した仕事は残されており、且つそれは我々が駆使できるより良き分析装置と、より大なる実証的資料と結合して企てられなければならない仕事であろう。この点においてマルクスの冒険は我々にとって失われてはいない。

1 2 マルクス主義者は非マルクス経済学を「ブルジョワ的」として叙述する習慣がある。この言葉はマルクスによってそれに与えられた元々の意味が失われたものである。マルクスは自分自身はブルジョワ的経済学者と規定している。十九世紀タイプの資本主義世界が終結をなし、社会的進化を完成させ、無限の彼方に送り込まれる、そうしたことを信じている一人の経済学者という意味においてである。これは少なくとも科学的基準に即してその言葉を定義するものであり、それに労働者達だけがそうした信念に耽るどんな残された経済学者もいないという不利益のもとにおかれたことを示す言葉であった。・・・後になって、彼等が無能であるか、またはブルジョワジーの利益の愚鈍な防衛者であるかにあたる言葉となった。

1 3 今日、充分且つ素朴な意味で一個のマルキストになり得る者は誰もいないし、しかも同時に自分は科学的分析を公平に扱っているのだと装うことができる者もない。もし彼が真実に立脚しようとするならば、非常に異なった構図、それも重要な点で異なった、更にいくつかの点では反対の含蓄をもった構図が出てくるであろう。しかしながら、支持し難いものが放棄された後、尚、土台は残るところが大であることは少なからず明らかである。

こう進む限りではマルクス自身は、彼の際立った諸資質の故に、彼の提携者達や追従者達——無批判で視野が狭かった——のいくばくかよりも悪い位置にあった。彼の諸資質の中には、一方で事柄の論理についての鋭い感性があり、他方では文化的価値についての鋭い感性があった。我々には共産党宣言からの我々の引用に戻って関説するだけが必要である。ひとたび、それだけ多くのことがブルジョワジーの時代の必然性と諸業績の双方につき認められるのなら、引き続く搾取についての燃え上がる攻撃はその確からしさの多くを失わせるものである。奇妙な設問が自動的に設せられることになる。マルクスの意味であれ、その他のどんな意味においてであれ、搾取は文化的業績の必須の先行条件ではなかったか、その時代というのは、実は過去の時代ではなかったのか、と。搾取という言葉は、そこで、その毒牙の多くとその意味のもち得るところを失うことになるのである。古代ローマ人達が奴隷達を——叛乱を起こした時に——処理した方法は、古代世界にそのヒューマニティに対する特殊な意味を与えるような、全てのこととの不愉快な結縁性を獲得するのである。今日では、賃金目録以外には社会的世界の中にあるどんなことをも洞察する能力がないという、そういう資質によって社会主義者のポーズをとる野蛮人達があり、その親方であることが——マルクスがそれらの全てにつき当惑することがなければ——マルクスの権利の枠内にはあるのである。しかしマルクスに対してはこの憐れむべき権利は否定される。

1 4 今や我々はそれ(歴史の経済的解釈・・・編者)を構成する2つの命題の第2の命題の信頼性に一つの意見をつくり得る。内生的または自己推

進的といえる経済的進化に対して、あるいはまた、でき得る限り平明にそれを設けるとして、資本主義社会の経済過程は——正にその構造からして——それ自体を革命化し且つどんな与えられた時代にあっても向かうこともあろうそれぞれの均衡状態を破壊せずにはおかないという命題に対して、マルクスは自分のケースを確立することにどこまで成功していたのだろうか。回答は、私は信じるものであるが、マルクスはそれがそうであると正確に認知してはいたが、当該命題の論証には成功していなかった。

更に正確に類似の回答が上記設問の背後にある設問に対して与えられている筈である。この経済的進化はその制度的枠組みを常に社会主義が不可避免的に結果するようなやり方で変換していくであろう、という確信をもつことでマルクスは正しかったかどうか。資本主義マシーンをどこまでも——我々がどんな時代にあってもその運行を見出すであろうようなどんな状態からも離れていくように——展開させるであろう諸要素が存在すると主張している命題が正しかったかどうか、これを事実認識上の設問として提起するかたわら、今や我々の前にある命題は特定のコースを採りつつある未来の発展についての命題であるということ、これが解明されるべき第一の事柄である。

15 今や未来の出来事についての諸命題または予見(**forecasts**)は——言葉の厳格な意味での予言(**prophecies**)でないならば——現在と過去に作用してきたメカニズムへの固執を仮定しているという意味で仮説的である。天文学上の出来事の予言ならば、それが損害を与えはしないだろうことは確かだと安心しておれるので、それが仮説であることに敢えて言及する必要はない。しかし社会的分野ではそうはいかない。従ってマルキシアンの諸命題は、すぐさま「もし我々が観察している過程が正しい道を探り続けるならば」、という但し書きによって修正されなければならない。全くの正統派マルキストといえどもこれを認めている。一事例として、ヒルファーディングのような真にマルクスの厳粛性の中に浸っているような人物が、「資本主義は言ってみればその重さの故に崩壊するであろう」という理論は棄てる必要がある、と考えたことを以前にほのめかした、という事実によってその根拠を示すことができよう。ヒルファーディングが描いたこれに替わるものは「大企業の累進的統合」であるが、これは恐らく特殊に納得してのことではない。というのは、そうした機構は帰するとこ

る「一種の官僚制社会主義」への接近に向かつての明白な屈折を示すものであろうから。ともかく、それは多くのあり得ることの一つでしかないが、我々がそれを承認するやいなや、他の可能性を排除できなく、そこで、その本来の位置に負荷されているところの決定論はどこかへ行ってしまうことになる。

16 しかし行論の筋にもう一つのものがあるようにみられる。その筋はマルクスが実際に取り上げた教条と少なくとも同じようにそうしているマルキシアンの信条のファンダメンタルズとの一致部分である。マルクスが展望したタイプの崩壊を期待することは完全にナンセンスであろう。窮乏化の理論が事実と反している、資本主義過程の正確な分析から実際に期待できるどんなものとも反している、このことは同じである。しかし資本主義生産の諸条件が「人間性の心的状態と文化的外観」を「行動と思考の諸習慣の資本主義的様式」からかけ離れたものにさせるよう変換されることはありうる。資本主義的な経済行動が、一方において企業者乃至は資本家と工場内にある煉瓦や原動機の間と与えられた密接な関係を破壊するならば、それは資本家がかつて産業のキャプテンであることを意味していた、その領主的位置に関わった全てのものを摩耗し尽くすこととなり、他方において資本家が依って立つところの家族制度と生活様式の中の動機の体系を破壊するならば、それによって財産が保たれている掌握力を解きはなしてしまうことになり、その世代は資本主義社会のあらゆる標識灯が正に意味を失うところにまで進化させられることにはなりはしないのか？ これは実際に起きることではないのか？ そしてマルクス主義者はこれで充分ではないのか——我々は結局において悪い理論の疑わしいきらびやかさを欲しているのだろうか。

17 この社会—心理学的過程が、多くの重要な点で社会主義を招来させようとする諸要求——とりわけあらゆる生産手段の上に社会的統制をおこうとする動機——となるような、いくつかの事柄の首位にあることは疑いない。この過程を外部から妨害しようとする諸々の事件は疑いなく屈折したものであろう。それを永久に押し込めようとするとも考えられる。しかし現代資本主義の社会システムの枠内では、こうしたことがありそうだ

と示す何物もない。

18 この過程は文化的並びに政治的補完物のもつ極めて幅広い変異種の枠内で進行できるものであること、並びに社会的オーガニズムの権威主義的諸形態がそれに関与する必要は必須のものではないということ、が特に注意されてしかるべきである。民族主義者の独裁下の社会主義は職業的社会主義者の言葉を以てすると社会主義とは認められないかもしれないが、科学的分析の冷徹な雰囲気の下では全て同じく社会主義のラベルを貼られなければならないであろう。社会主義者である人々のうちの多くが自分達が愛育する理想を——彼等をして資本主義社会の自由と民主主義を渴望させるであろうものと同じやり方で——今や求めるであろう、というそういう諸状況を求めて我々のいくらかは生きていくだろうことは全くあり得ないことではないのである。資本主義社会の最上層の人々が時折彼等を没落させるような書物の正にその出版の費用負担をなすといった優しさを身につけているのもそうである。社会主義者達の多くは、その場合、これは自分達が闘い取ろうと意図してきた類のものではない、本当に考えているのは自分達によって運営されている場合のみの社会主義であって、そうしたものは他の事柄だ、と明白に言い張るであろう。これが成り行きであるべきだとしても、マルクスは彼が来るべきものの本質的諸特徴を——その定式化は不正確であったかも知れないにせよ——正確に見通していた、という補足を受ける資格がある。

もし私が私の含意を伝えることに成功していたならば、「社会主義の必然性」についての更なる言葉は必要としないであろう。しかし進化と革命の間の正確な関係がその師の考えの中で如何なるものであったかについて、マルキシアン達が経験する困難から出てくる一つの道を同時に示唆している我々の行論を我々は追加してもよいであろう。

19 華々しい革命が、想像に火をつけようと企図しているようなどんなポスターにも、「特徴づけられ」なければならない、ことは疑いない。更に次のことも同じく全く理解できることである。すなわち、ある具体的なアイデアに熱病的にとりつかれた人は誰でも、それについて語りつつある

時とそれに関連して行動している時には、自分が書齋に戻るやいなや至極当然の事にとらえられるような諸結論や諸態度を用いる術(すべ)を容易には見出せないだろう、ということ。このようにマルクスは疑いなく革命を説いたのであり、エンゲルスは様々な戦術を——来るべき物理的な衝突の中で自分の役割であるとはっきり意識していたものための準備を整えんが為——研究するという辛労に実際に赴いたのである。

しかしこの種のことは、もし我々が思想家の審判に赴こうとしているのなら、考慮から外さなければならぬ。彼の全体系は歴史的因果連鎖の論理の中での最も硬い信念に基づいたものであるから、マルクス自身の諸標準を革命家達に共通した小児病的諸態度と共に分かち合える程にそれほど引き下げることで彼を非難するなどにはでき得ることではない。同時に、彼は制度的構造物には内在する慣性の作用をもとより明らかにしたのであり、社会主義の実現への最後のステップとして革命は恐らくは必要だと考えていた。しかしそれは革命一般ではなくして時の充分性の下での革命であり、このことがあらゆる他の人達との差をつくっている。誠実なマルクス主義者は誰彼なくロシア革命——それは彼等に受け入れることができる解釈を許すコースの恐らくは埒外にあった——との関係でこのことの含蓄が指摘されることに苛立たされたのである。

(2) 経済学者 マルクス

摘要

社会的・経済的カテゴリーとしての資本、労働量価値、剰余価値の変換としての貯蓄乃至は蓄積、資本家達による全剰余価値の搾取、競争の圧力下に行われる一層多くの剰余価値を求めての労働節約的機械への不断の投資、絶望的紛糾へ投げ込まれるかたわら労働者の産業予備軍とも結合した窮乏化、景気循環、淘汰的集中、そして崩壊。経済分析の技術で見ると限りマルクスはリカードの最初にして最後の弟子であった。平均概念による——実は偏差こそが重要なのだが——諸価値と諸価格の把握、平均的状况からの推論は彼の単純化された社会学と弁証法的社会哲学に結合している。静態的均衡下では剰余価値は絶望的に支持され得ない。とりわけ「労働」という商品には決して適用され得ない。更に言えば、競争を搾取ゲームにまでもたらず諸状況は企業者機能による動態過程の中にこそ存在するものでなければならず、これこそ如何なる他のルーチンの過程よりも遥かに重要である。この機能の創造的局面を通して諸事実を探查するならば、窮乏化や集中の諸相はマルクスの呈示よりずっと異なって見られよう。一連の分析における失敗、それにも拘わらず、その背後に現れる何かがある。この何かは経済変化の歴史過程の理論モデルを構成する。・・・その他
(編者)

I—(2)—1～23

経済学者 マルクス

1 マルクスについての篇の下で・・・

マルクスは均衡状態でもって推論してはいない、そこで搾取すらもが正当にあり得ることだとさえ解釈する。

2 一人の経済学者としてのマルクスの理解は——技術的な点に関する限りで、だからして——「彼が最初にして最後のリカードの生徒であった」という事実から始まる。

時間モデル・・・リカードの観察律(Betrachtungsgesetz)・・・

3 しかし不変資本(constant capital)の利潤喪失性はこれら全てに回帰しなければならないのであろうか？・・・資本の理論・・・リカードの観察律

進化かまたは革命か：くだらない論争・・・時の充分性をもった革命は「革命を以てしては新しい状況が創出され得ない」ということを知っていた。・・・だが、そのヒューマニティは！！

4 国民の生活内実が一個の理論である——そうしたことが論理的に可能であろうか？・・・恐らく他に多くのものが。・・・宣託——それは他と同様ではあるが、一つの功德である。・・・利点も欠点もない。

諸作用の複綜・・・かくして何がマルクス風のことなのか？——更にそれは可能なのか？・・・そして私の限界理念(Grenzidee)に対してそれはどのように向き合っているのか？・・・
ある状態がそれ以前の状態によってはっきりと規定されている(平均の概

念に対して残余のものが重要)、という意味での一個の明確な規定(この意味での平均)。

5 幾人かのマルクス学研究者に従って、それが際立って本質的であるかないかは別とし、我々はマルクスの労働数量価値が単に社会的所得の総体を労働所得と資本所得に分割することを演じる用具として資させようとする見解をとる。(個々の相対価格の理論はそこでは第二次的な問題となる。)というのは、我々が今、検討するだろうように、マルクスの価値論は——我々はその仕事を個別価格の問題から分離することができるとなす限り——その仕事に、帰するところ、失敗しているということになるからである。

6 マルクス——彼のより深い重要性・・・
その中にある本質——消費支出に対する赤いチェックの必要性を示したこと。

7 マルクスにとって、貯蓄と蓄積は「剰余価値の資本への転化」と同義である。貯蓄への個別的な試みが必然的且つ自動的に実質資本を増大させるものではないが、私はこれを検討課題としようとは思わない。今日多くの経済学者達が——その中ではケインズ氏によって導かれるか、または影響を受けている諸グループが際立っているのだが——これを否定し、時にはそれをしてある確からしさを現わさせようとする論点とは反対となる可能性があることを強調している。しかし不正確ではあるにせよ、マルクスの見解は、ここに私が挑戦する価値ありとは考えないほどには、真実に多分近いように私にはみられる。

8 偉大性、諸帰結の双方が社会的なものと結びついている・・・
だが、その理論には欠点がある・・・ケインズの判断・・・もう一度地

代論を・・・アジテーション的・・・彼の理論は歴史的であったのか？・・・

 利率の低下といったこと、第Ⅰ巻と第Ⅲ巻・・・人間による人間の搾取・・・この理論は歴史的であるか？・・・
 経済的な歴史把握の「滲透」・・・動態論・・・範疇的精緻性・・・

9 マルクスはあらゆる彼の哲学的造詣を以て——尚本質的に——一個の動態論を構築した！ だが均衡理論と発展理論の間の諸関係を正しく検証しはしなかった。・・・彼にはそうしなかったことが多すぎる。

[V]における集中と更に総崩壊・・・そして与件変動(Datenveränderung)・・・外的事情・・・

10 理論——誤っている、技術的にもヴィジョンにおいても・・・企業者—資本家としている・・・窮乏化——相対的窮乏化である。・・・それらが改善されたとしても・・・動態的—進化的・・・更に魅力的；政策の解明、更に起こった全てのことをも！・・・政治の包含・・・そして第二命題は経済的に異なった路線に属する。・・・人間の性質・・・地代理論・・・Vに至る。

 帰結：社会主義への発展とは如何なる意味のものか、a) 進歩においてどの種の意味か、b) 私の理論——だが何を以て社会主義と呼ぶか。・・・どのようにそれはヒットラーリズムと関わるのか。

11 歴史の経済的解釈が如何に価値のある用具であるか、に注意を払っておく必要がある。門人達は歴史のもつあらゆる秘密に対する比較的単純な鍵を受け取り、それによって諸観察と諸理念を整えさせ、時代を同じくする諸事象を配列させる見取り図(uniform schema)を受け取った。・・・世界中のどこにおいても生起している事柄が、マルクスの章句の光の下におかれると単純にして明瞭なものとなる。・・・そうした分析ですら非社会主義者の論文内容に比して大きく優れている。歴史の経済的解釈の不出来な姉妹である社会階級についての理論ですら、もしそれによってプロレ

タリアの自覚という理念の中に叩き込む用具としての価値の故だけならば、その場合我々には違ったように見える。

12 マルクスに従えば、資本主義の世界に対しては——もっと早期の状態がもった一層に複雑した構成にとって代わって——二つの社会階級だけが存在する。ブルジョワジーとプロレタリアート。両者の性質を区分するものは財産所有の有無、持てる者と持たざる者の差である。この高度に単純化された構図は——歴史は階級闘争の歴史であるという命題は——マルクス自身により、ブルジョワジー内部の諸グループ間の、並びに異なった諸国のブルジョワジー間相互の、戦いの承認——それは彼等が封建グループかまたはプロレタリアグループと戦った、または戦っているのと全く負けず劣らずの頻度で戦っていることの承認——によって修正されなければならなかった。修正は理論を事実と明らかに衝突することから救うかたわら、その心臓を引き裂くものである。更にブルジョワジー優越の初期の時代には他の人達より有利な位置には全くなかったいくらかの人達による財産の獲得の問題がある。マルクスは当然この問題を解いたが、貯蓄といったものについての「子供じみたおとぎ話」に触れる気乗りのしない解決であった。

このようにブルジョワジーの階級的地位の起源は、依然ダークの下にある。その後のブルジョワジーに向かってなされる非ブルジョワジー要素の不断の高まり、並びに階級的機能の充足に耐えられない家族のブルジョワジー階級からの離脱——すなわちワイシャツ姿からワイシャツ姿への三世帯——がある。この現象はマルクスの追随者達によって無視され、みるべき研究成果はない。財産所有を以てする階級区分とそれに即した敵対関係の諸原則がその全てである。

13 マルクス自身は社会階級につき、どんな理論をも発展させなかった。ただ理論構成のための礎石と原動機を提供した。フランスにおける階級闘争の歴史はその優れた例である。・・・ただし現象をもっぱら経済的な語句で試みていること、並びに全ての事柄を生産手段の上に支配権をもつ、もたない、の人々の間に設せられた非現実的でしかも二次的な区分の上に帰せさせようと試みていること、等は正にマルクス自身が創設した諸困難

に対応するものである。すべての点でエンゲルスの社会階級の理論は、マルクスの諸基礎の再生でも運用でもなく、マルクスとエンゲルスは分業関係のものであった。そうは言っても、歴史の意味付けである階級闘争のスローガンの追随者に対する訴えは、それによって切り下げられるといったことは全くなかった。

14 分析における一連の失敗と益々大となっていく章句——それは疑わしい宝石を研磨するような誤った社会学と結合している——の失敗。これは今日の有能な経済学者達の大多数がマルクスの経済学にためらいなく与える評決である。しかしこの評決の中にある確信を揺るがすであろう事実を考察することに失敗があってはならない。如何に荒々しく我々がマルクスの予言と修辞を裸にすることができても、その背後にそれ自身の意味と価値をもつ何物かの全容が現れてくるのである。更に如何に厳しく誤りを責められようとも、何物かが残されるのである。この何物かとは、経済的变化の歴史的過程につき一個の理論モデルを構築しようとする試みである。

その意味するところを明らかにせんがためには、歴史の経済的解釈とそのマルクス体系全体に対する根幹的重要性につき言われてきたことを想起しなければならない。我々は今やそれを分解した二つの命題の内の第二のもの——社会生活の中の経済的要素はそれ自身の中に進化的推進力を含んでおり、その推進力たるやそれ自身のロジックと必然性により生産の社会的並びに経済的諸条件を変更し、更には第一命題のおかげ(徳目)で他の全てのことを変えていくとするもの——と取り組んでいる。そしてマルクスの純粹に経済的な行論——彼の経済分析、つまり我々が通常「理論」と呼んでいるもの——は、何故に、且つどのように経済機構がこれほどにも絶え間なく変更され続けるのであるか、全ての経済構造(社会主義のそれを除く)が生み出す発展妨害的諸力は何であるか、更にそれらの諸力はどのように別のしかるべき構造をもたらすよう、且つ併せて他の文明の社会的諸条件をもたらすよう働くのであるか、を示さんがために必要な概念的用具の装置を提供する目的に資するものなのである。

通常経済理論は、このようなことを試みたりはしない。しかし我々は——リカードがまたもやその著者なのであるが、その著作の数ページに渡っ

て、とりわけはつきりと見出される——地代・賃金・利潤の歴史的な、そして未来の道程についての特定の諸命題からなる「経済変化の理論の諸エレメント」を見出すことは真実なのである。マルクスは、彼が多くの局面でリカードの教義から出発していることは疑いないところであるのと同じく、これらの諸命題から出発したということは十二分にあり得ることである。だがここでリカードが提供した仕法は極めて僅かであり、非マルクス主義理論の中ではその僅かなところすら、ジョン・スチュワート・ミル以降は完全にとりわけよいい程に死に絶えたのである。

15 様々な種類の経済的メカニズムの叙述に留まらず、我々が考察している現実のメカニズムの歴史的進化——それは文明の曙光から、資本主義を経過し、更により先にと進むものであるが——を正確な原則に帰属させることを企てるという、そうした経済理論のアイデアはマルクスにのみ割り当てられるのが公正だということ。そこでは理論は歴史的含蓄と現実生活の紛争と破局についての、リアリティの魅力あるフレイバーを獲得するのであり、それは他の経済学者の理論構成には必然的に欠けたものであることは間違いなく、彼等は与えられた経済諸システム——そのいずれもが適当な諸仮定によって定義されている——の作動を分析する諸手段を提供することで満足しており、そして彼等が経済史家達と社会史家達の多数派と完全な見解の一致をみている、そのことは、「これらの諸システムのあるものの歴史的継起について、あるいはある歴史的状態が他のそれを“生み出す”ところの道程については何も言えない」という、まさにそのことである。

もとよりこれら全ては誤りを許しはしない。その上この歴史を単純な諸原則に帰させようとする壮大な目的は疑問視されることがはつきりしており、且つ容易に我々の仲間のいくらかによって——そうした知ったかぶりの他の「歴史哲学」と同様に——これらは厳粛にして自覚的な歴史家達にとっては通常いただけないものであった——公判なしには否決されかねないものである。たとえ我々が異議を唱えないとしても疑問はマルクスの社会ヴィジョンの正しさに関し、且つそのゴール——どんな実際的なゴールとも区別されるべき科学的ゴール——についての実現に向けての「彼の特別の貢献の価値」に関して依然として残されるのである。

16 そうすることでマルクスはより鋭く、しかもより深いヴィジョンをもつというメリットを得ただけでなく、リカードから受け取った概念装置を改良するというメリットを得た。例えば、リカードの固定資本と流動資本の間のルーズにして粗雑な区分を不変資本と可変資本(=賃金)との間のずっと適切な区分に置き換え、且つ生産過程の持続期間についてのリカードのもやもやした観念を「資本の有機的構成」という、はるかにずっと勢いのある概念に置き換えた。しかしもっと重要なのは資本主義過程の分析の中の「資本に対する正味の報酬」に対する合理的評価を与える試み、すなわち彼の搾取の理論である。

恐らく大衆は挫折させられ、搾取されていると常に感じていた。だから彼等は理路をわきまえるや直ちにそうだと語ったのである。ともかく知識人達は大衆の集合的な諸見解を大衆のために定式化し、大衆に対しそうなのだということを常に語ってきた。ただ、それによって正確な意味を与えるものでは必ずしもなかった。マルクスの長所と成功は、彼が彼以前の大衆心理の解説者達の行論——どのように搾取がもたらされるかを示そうとする試み——のもつ諸々の弱点を自覚していたことである。交渉力といったものについてのどんなスローガンもマルクスを満足させなかった。搾取なるものは、時たま偶然に個別的な諸事情から発生するものではなく、資本主義システムの正にその論理に由来する結果であって、不可避的であり、どんな個別的な意図からも完全に独立したものである。彼が欲したのはこの論証であった。労働は——労働の諸サービスではない——商品となり、他の商品と同様に売買される。ここより労働価値の一般法則が適用可能となる。即ち、労働の量は価格をそれに含まれた人々の働く時間の数に比例したものとさせていくであろう。だが労働の量で含まれた人々の時間のどんな数が？ よろしい。人々の時間の数とは、かの労働者に養育と衣食住を得させた且つ得させているものである。これは労働の価値を構成し、労働者はこれに比例した諸賃金を——均衡状態では——受け取るであろう。彼はこのように自分の労働の十分な価値を受け取る——そしてそのどんな部分にも逸せられたものはない。だが労働者は、自分の労働(労働力)を生み出すため取られるよりも、更に多くの時間数を働き出すことが出来る、ということも事実である。後者から得られる生産物も同じく——均衡状態では——資本主義社会の諸市場でそれらに投じられた人々の働く時間数に比例した価値を持つことになろう。かくしてそれぞれの労働者の生

産物の価値は彼の労働の価値よりも一層に大となるであろう。そしてその差、余剰価値は資本家に行く。資本家的評価の機構をコントロールしている基本法のおかげで、必然的にそうなのであり、労働者はそこでは「彼の」生産物のその十分な価値を得ることを逸されるのである。

搾取(**exploitation**)なる言葉はマルクスの科学的行論と合体したものであり、彼のバトルを闘うべく行進する弟子達を満足させるのに役立った。しかし次の点は指摘されなければならない。定常的経済過程の理論の通常の水準にたてば、マルクス自身の諸仮定の下では剰余価値についてのいくつかの教義は絶望的に支持し難い。労働価値論は——たとえ他のあらゆる商品には正確であったとしても——労働という商品には決して適用され得ない。労働者達が機械のように原価計算に対応して生みだされる、ということをこの理論は意味しているのであるから。論理的には、もしマルクスがいわゆる賃金鉄則を受け入れ、且つマルサス風の諸ラインに即して論を進めたならば、彼の位置は改善されるであろう。しかしこれこそ極めて注意深く拒否されたところである。その上、完全競争的均衡はあらゆる資本家—雇用者が搾取利益をつくる状況では存在し得ない。というのはこのケースだと、彼等は個々に生産の拡大を試み、その数量効果(**the mass effect**)が不可避免的にその種の利益をゼロに迄切り下げる傾向をとるからである。不完全競争の理論に訴えることにより、競争の作用を——摩擦や制度的禁止、または貨幣や信用上の障害などを強調することで——幾分かはこのケースを修正できる可能性はある。しかしこうしたやり方での修正は極めてモデレイトであり、マルクスが心から嫌ったものである。

しかしマルクスの行論の実質はそのようなレベルにはなかった。彼が考えていたことに比すれば定常的経済過程や静態均衡のどんな命題も二次的な重要性をもつに過ぎない。更にマルクスは、自分のポジションを基本的には傷つけることなしに、次のことを認めることができた筈である。完全均衡状態は資本主義社会が決して到達できなく、且つそこではブルジョワジーが存在し得ない状態であり、その状態は生産物の諸価値と生産諸要素の諸価値の間の——測定されたとしたら——どんな差とも両立し得ないということ。剰余価値はブルジョワジー達が生産を革命化する時はいつでも発生するものであり、更にひとたび新技術が確立されると、この余剰は消滅する傾向をとるという正確にこのことの故に、そこでの紛糾がマルクスをして多くの——赤々と燃え上がり、しかも時折誤導させるような——記述に永く生命をもたせることを確実にしているのである。マルクスが

事実問題として競争そのものがそうした余剰——その発生は労働価値説の教義とは何等関係がない——を消滅させる傾向をもたらしことを認めてはいなかったことは真実である。そして彼の分析が正され適切な動態論設定の中におかれるならば、部分的には救済できることもまた真実である。

17 生産の様々に異なる期間(時間)の導入が——それ自体現実、且つあらゆるケースにおいて——諸商品の価値についてのマルクスの基本理論によって指示されるそれとは異なった価格で販売させる原因となる、ならないかという疑問がある。実情をいうと、マルクスはこれを疑問視することはなかったし、リカードのこの論点についての不完全さを見出しており、しかもそうならないことの重大性をリカードよりもよく自覚していたので、彼は——論理的障害に逢着した時、真の理論家達ならばそうするように——あらゆる頑固さを以て、もし諸価格が労働の量への比例性という法則によって決定されないならば、どのように現実の諸価格は決定されるのかを示すという仕事に没頭した。そして更に進んで諸価格が決められている原理は、かの労働価値の法則とは結局において実は矛盾しないのだということを証明しようとした。

このため数年の歳月と数百頁の紙数が費やされている。しかし彼の努力の最終の結果が現実、我々の眼前にあるものかどうか、は公然の疑問である。というのは彼の主著の第三巻は、彼の死後に継ぎ合わされたものであり、そうした但し書付きの性格を大いに含むものであるから。しかし問題が師によって悪く設定され、弟子によって悪く受け取られていることには論議の余地がない。書かれてあるように定式化するならば、比例性の原理と利潤率均等の原理は——もし同じ平面で導入されているのならば、だからして諸価格は同じ意味においてと行論の同じ段階でという双方において一致しなければならず——論理的に両立し得ない。一方が他方よりも論理的に優先し、他方が前者の諸帰結を修正していく、という意味においてならば両立しえないことはないが。マルクスの労働価値説は相互に了解することに失敗した防衛者と批判者の諸努力によって平行線となってきたのである。

18 資本家は戦利品「剰余価値」を労働節約的機械に投資する。マルクスの行論からは、資本家たる者は正にそうする筈であり、しかも敏速にという点が本質的である(蓄積の理論)。何故に不可避的で自動的にこのことがなされる筈なのか、その理由は競争の圧力を以て証明される。競争が資本家にこのコースを強いるのであり、さもないと競争から脱落させられるであろう。このことは経験的事実の観察によっている。諸事業体が自らがあげた利益の大部分を事業にむしり戻すよう強いられている、他に選択の余地はほとんどない、このことを我々全ては知っている。しかしこれは資本主義的進化の急速な率の原因ではなく結果である。そこで説明しなければならないのはこの進化とその率であり、ひとたび説明がつけば、それは次から次へといつの時代にも存在している産業的自動機構のもつ「際立った不安定性と刺激性」を説明し、更には全ての設立されてある事業体の「不断のモデルチェンジ」の必然性を説明していくのである。こうした説明なしには利益の再投資の過程、とりわけマルクスによって指示された方向での再投資は動機を欠くこととなり、そしてその動機はマルクスの著作自体の中には見出し得ない。

だからして、搾取の理論と搾取の説明から得られる結論は、仮に事実問題としてのその解明が満足するべきものと言えさえするものであったとしても、尚不十分なものとなる。だからしてマルクスの付けた橋は単なる表面上の現象に過ぎず、我々が彼の理論と彼のヴィジョンにとって全く外来性のものである諸要素によって釘打ちがなされるものでなければ、我々の下で壊れてしまうという理由から、我々はマルクスの彼の次のステップにまでついていくことができない。

主要な釘は投資のどんなルーティンな過程よりもはるかに重要なものであるところの企業者機能である。更に言えば、それ以上に投資がファイナンスする「創造の仕事」から自らの重要性とその含意を獲得するところのものである。マルクスはこのことを考慮することができなかった。彼は企業者と資本家を同一視する旧古典学派の見解を受け入れた。二つの機能が彼等の時代の家族経営の企業ではしばしば一致するという環境を拡大することで、こうした同一視は部分的には許されることかも知れないとしても、それにしてもそれは誤った分析を留めている。

このことから離れても、しかしながら、マルクス自身のヴィジョンとその理論的装置の構造は彼をして資本主義の過程を見させるのに「何かある

種の自動的で非人間的なもの」とさせることを不可避とさせた。そこでは唯一の創造的な作用力である労働が逃れられないよう鎖によって自走する装置に縛り付けられているとみるものであった。この装置は走るにつれてそのように自己展開をなすのであるが、再投資こそが、この展開に利用可能な唯一の自動的要素であった。どのような他の見解も寄生的な資本家階級の構図を引き出すことが困難であろう、というのがその理由であった。

寄生的資本家階級のもつ唯一の機能はと言えば、働いている労働者から価値を絞り出すことであり、且つそれを再び生産過程の中へ絞り込むことであった。しかしながら、如何なる重要性も、これにはり付けられる必要はない。マルクスの分析装置はそのようには作動しないだろうということでも全く充分である。それはそれとして、類似の理論的情況と類似の実際の諸傾向が我々自身の時代の貨幣的理論の多くの中に存在し、且つまた、責任を負っている。我々の時代の最も輝かしい作家の幾ばくかを以てすると、投資はまたもや「誤った装置がなそうとしてもなし得ないそのこと」をなすべく構築された標語となっている、ということに留意するのは興味あることである。我々はこれを当世の習慣に従って景気循環の貨幣理論と呼んでいる。

それにも(以上にも)かかわらず、我々をして揺れ動く橋を渡ってマルクスの蓄積の理論を受け取らせよう。

19 マルクスのリカードへの直接的依存は他の如何なるところよりも生産過程における機械化の諸影響の段において大きい。たった今述べられた裂け目を渡った我々が取り組むべきもの、「窮乏化の理論」はリカードの機械化を扱った有名な章に完全に寄りかかっている。マルクスは労働者が累進的な進行率で機械により排除されていくとなし、自分に対する諸批判には激怒に満ちた当てこすりを浴びせた。彼は根拠が安全でない時、いつもそうするように。そのように排除された労働者達は——あるいはマルクスによって日常的に供せられる言葉では街頭に投げ出された労働者達(産業予備軍)——は賃金を引き下げさせる。そこで一方において累進する悲惨が結果としてもたらされた傍ら、他方で創出された生産能力と社会の消費能力間の乖離を増大させた。

これら全ての中に認められるべきものは何もない、あったとしてもせいぜい経済的変化に付帯した強度の臨時的混乱の上に極めて控え目なケースがつくられたに過ぎない。蓄積の理論から得られるのは、全体としてとらえられた生産過程での労働の排除は競争下でという諸仮定の下では出てこない。更に総実質(total real)賃金の——相対的とは区別された——絶対的低下は排除からは引き出しえないであろう。最後に生産能力と生産物の吸収能力との乖離は賃金の絶対的低下からさえも引き出せない。

マルクスの行論のもつこの全体的連鎖が基本的に悪いものであったとしても、改良された諸分析が——適切な諸仮定の挿入といったことをして——マルクス流の諸結果のそれぞれを可能性としての、乃至は傾向としてさえもの——基本的な諸要因によって、それはずっと見劣りのするものにされるであろうが——叙述し、そうしたものの論証となるかも知れないことは真実である。これあるが故に、資本主義の時代の全体に渡ってみられる実質賃金の上昇を伴った雇用の着実な増加を、マルクスの明確な論破として、指摘することも全く正当化されない。

そうした間奏曲は、新しい国々を開発する場合になされたことと一致して、結局においては何事をも証明するものではない、ということが容易に答えられ得るのである。理論的な行論は理論的な行論によって論破されることがあるのみである。しかしこのファクトがマルクスの行論が破産に遭遇していることをテストしていることは確かである。

20 機械化の自動的な過程の圧力の下で、事業体群は——下降型コスト・カーブに沿って——絶望的な紛糾の中に突き落とされる。この紛糾は過剰生産と過少消費の双方によって特徴づけられるものであり、そこでは益々少数の者が生き残り、その他の者と連繋している資本家達は累進的に「奪われていく」ことになる。熟練工の消滅や巨大企業の成長の事実、その他のこのことの実事上の含蓄を描き出しているような事柄等々は明白であり、しかも誠実に——勝利感をもって——指摘された。この勝利が、実際にどれ程に大きいものであったかの論証、及び述べられている部分的には確かにそうであったことがどれ程に満足のいくものであったかという設問については我々は見送ることにする。同じ結論に導き上げられている行論の他のブランチについては言われ得ることはさほどに多くはない。

更に推論された生産する力と消費する力の乖離は反復する資本主義恐慌を説明するためにつくられた。景気循環論としてこれは、資本主義システムの作動そのもの(the working of capitalist system as such)はそうした乖離をもたないのであるから、全く落第である。この理論は不況が実際に起こった場合に観察される表面的な現象の叙述に誤った用具を適用したもの、というより以上のものではない。

いくらかの人々が天才の一撃と考え、他の人々が分析における単なる誤りであると考えような作品では、同一の行論が資本主義の最終的破局に至る迄の深読みがなされることになる(「崩壊の理論」)。時から時へと恐慌を生み出していくであろう同一のメカニズムが時の過程と共に密度を増加していく。そして何等かのあるそうした恐慌が——先行する恐慌と種類において異なるのであるが——或る日、そのシステムを失敗、恥辱、悲惨の混乱の中で殺してしまうであろう。その場合、階級的自覚をもったプロレタリアートが抵抗し難い勢いで立ち上がり、生産手段の収容——「収奪者の収奪」を行うであろう。このことを「真に偉大な精神の下に教えた」ことはマルクスの荣誉と言わねばならない。この構図の中には如何なる恐ろしい事柄も意味されておらず、如何なるサディズムも入っていない。それは労働者だけでなく資本家をも、——彼等は論理的にも完全にこのシステムの特種な種類の被害者と考えられている——普遍的に解放する構図なのである。解放は途方もない文化的諸力(新しい文化的創造の源泉)をも解放する。ここにおいて我々は更に進んで「進化か革命か」という見出しの下で行われる愚かな論争を片付けることになる。すでに強調しておいたように、マルクスは歴史的センスを、つまるところ欠いてはいなかった。

21 恐らくはマルクスはその足取りを速くすることは可能だと考えていた。ここにあげる例は彼の奇妙に曲がりくねった自由貿易賛成論である。練達のエコノミストである彼は、自由貿易は労働者階級の利益になる、とする立場にあると誰からも完全に認められていた。しかしながら、社会主義の指導者たる者はブルジョワジーのそうした主張を——多分正しいものであったとしても——承認することには強度に嫌がっていてしかるべきだとなし、単にそれが進化の足取りを速め、もって資本主義をより早く終わらせるという根拠に即してのみ、これに賛成した。

マルクスは、彼の意味での社会主義への「成熟」がないような環境下では革命の主導性(revolutionary initiative)を是認することは決してなかった。しかし彼はどんな社会にあっても制度的枠組みはその経済的基礎を永続させるような「それ自身の慣性」(“a momentum of its own”)をもつという事実を正当に認めていた。彼が革命によって排除しようとしたものが、このモメンタムであったことは確かである。暴力によって新しい世界を創出することを望む革命主義者達に共通した幼稚な態度の如何なるものも彼に課すことはできなかったが、とはいえ、彼の交友関係と彼の情熱は特殊なケースではあるが彼をして似た態度をとるよう変質させた。彼の革命は社会主義へ向かっての進化と両立できなくはないだけでなく、その実現であった。それは時の充分性の下での革命であった。

ついでながら言うておくと、このことがいまだに——そうでないにもかかわらず——マルクスを一人の洞察者(visionary)、科学的社会主義者、そしてユートピアン社会主義に対する反対者とみることに固執している全ての人々に対する回答である。産業の合理化が極めて徹底したところまで行き尽くされ、そして利子率がゼロに向かって収斂していると見込まれることができる場合、人々の心理的状态が、その上に封建的並びにブルジョワ的先入観を失ってしまい且つ心理的に大きな変化を肯定する準備ができていと見込まれることができる場合、そうした場合に時の充分性の下での社会主義は「全く理に適ったもの」としてあるのであり、どこかで、またどうにかして、しつらえ上げられた社会主義の図式からの単なる思想とは実際的にも異なった事柄となると言えるであろう。

22 マルクスの経済学についての我々のスケッチは以上の如くである。不完全ではあるかも知れないが、マルクスの体系の一般的性格についての一個の理念、彼がその下に自らの諸問題を見据えたその光、彼がそうしたことに関与させるべく持ち込んだ情熱と技法、等を示すには充分であろう。そうだとすると、一人の作家を賞賛することが、同時に犯された重大な誤りに有罪の判決を与えながら、行われるということになる。我々の多くにとって、そのようなことがどうして出来ようか、というエッジウォースに対する一つのパラドックスでもあるように見受けられるものを理解するための助けと、それはなるであろう。

一方においてマルクスの方法が時代遅れで、今や額面通り受け取れないことは事実である。その上、防ぐことが出来得るべき誤りが充満しており、どんな半宗教的昇華を以てしても変更には役立たない。綿密に検討を加えるならば、修正は——多くのケースで可能である傍ら——「社会的実体についてのマルクスの構図の基本線」の中に深く切り込んでなされる、ということになるであろうことが示される。誤りはその体系の上にランダムに散らばっているのではなく、マルクスの経済体系の中の最も典型的にマルクス的な教義のいくつかに対し、しかも最も本質的であるようないくつかの論点のまわりにかたまっているのである。そこでもし我々が、それらを支持できるものに再定式化するとか、あるいはそれらが含んでいる真実のそうした要素に還元するとか、そうしたことを為すならば、マルクス的な「非難の炎」は完全に消滅することになる。そうした作業は、バーナード・ショウがどこかで述べているように、「社会的憤激であるものの伝達」というところに自らを保とうとするマルクス的事实に対し真面目に取り組もうとするような何人においても極めて為し難いものとなる。

しかし他方において、いくらかのケースにあっては歪曲にも等しいこうした誤読をなした作家(マルクス)こそが、今日の時代においてすら決着のついていない、未来の時代の経済科学であるところのもの——この科学の構築のため我々はゆっくりと精力的に礎石と原動機、関数方程式と循環積分法を集めている——を洞察した最初の人であったということも多分に真実なのである。これは高度の偉業であり、孤高でありさえする。その時代に語られていることはもとより、その後で語られていることが、主としてマルクスが彼の経済動態論に与え、且つそれを社会動態論の体系へと拡大した「独特の出し物」であった。

23 マルクスの純粹に経済的な行論についての判定はすぐにも修正を要求されるように見受けられる。彼にとって最も問題であったのは均衡を外れた状態、または本質的に変化していく状態であり、それ自体を均衡の状態に仕上げることは決して許されることでなくして、反対にそれから更にもっと先まで離されていく(いき得る)ものであるところの他の状態を生み出すのだ、ということマルクスは説明しなかったし、且つ多分、気づきさえしなかった。

それは良くない。・・・恐らく次のように言うのがベターである。先ずは修正の結果述べるのが一番よく、そしてこのようなエッセイの中で可能な限りその多くを追加することである。純粹に経済的な行論と純粹に社会的行論の双方に関しては正しくすることが可能である。しかしそれでも尚、その最も堅い目的(aim)だけでなく、いくらかの細部の点でも問題は残る。その上牙は抜かれ、刺はぬぐわれるのである。科学は常に予言ではない。

そして帰結の召喚と同様に予見が問題となる。(資本主義の可能性についての展望？ 貧困の廃絶?)・・・修正によりあらゆる色彩と含意が失われる。・・・そうであってもそれは私がただマルクスを改良しようと意図しているとしてのことであり、尚一層の愛情を以て言うべきであろう、慣用の理論に立った批判は全く的外れであると。・・・しかし事態をそれは改善しない。・・・機構は、a) 経済と、b) 諸階級の上にある、資本主義とその動態についての誤った判断。・・・

ところで、そうしたマルキシアンの経済学だが、約言すれば、それはどんな冷徹な分析家——彼等は近代的科学装置をもって装備している——をも打撃するのに失敗するにきまっているのである。それは絶望とみられて十分なケースであろう。更にこのことは実際に力量ある経済学者達の殆ど大多数の宣告——疑わしい諸宝石で研磨されていることの中にある一連の失敗作——なのである。この声明を支持することにおいて、我々はケインズ氏を留意することだけを必要としている。

改善はこの場合、ただ含意の定義である。1) 非均衡、2) 不完全競争、3) 労働価値説、についての審問・・・ランゲ、魅力と実証・・・社会学については一つの課題である。・・・時間についての過程のモデル・・・

我々はそれでも尚マルクス主義者たり得るや?・・・理論は常に「・・・ならば」においてのみ告げられる。・・・経済的歴史把握の教義の重要性について述べるべきであることが忘れられてはならない。この2つの法則が論破する。・・・資本主義は虚偽の存在である!と。

(3) オストロ・マルキストなど

摘要

マルクスの理念、方法、経済学の後継者としての正統マルクス学派(ヒルファードィングやそうした人々)。金融資本、その産業一般の統制、大規模化・独占化・集中化と結び付けられ、そうした寄与により資本制秩序の安定化がなされた。1)生産し得る物を購入し得ないような本国市場における需要不足、2)利潤率を機械化により高く保とうとする試みの後の重厚な投資に由来する利潤率の低落、から逃れようとする資本家の手段としての帝国主義。他の市場や投資分野を侵し、残された前資本主義圏を資本循環の中に巻き込む。ナショナリズムと結合した本国政府を急き立てて後進国を征服させ、資本の投資によって植民地化し、競合諸国に対する非友好ムードに遭遇するや、更には戦争に赴かせる。結果として利潤不足の埋め合わせがなされる。もとより上述の図式が全てではないし、資本家主導の帝国主義的行動は稀かも知れない。むしろ、より重要な論点は、大きい政府に向けて国内諸政策の変化を強いることであり、課税の方法により公的部門の新しい設定と拡大がなされることであり、労働基準局・諸社会政策・失業救済と結合した公共投資であり、更には産業の官僚制的な計画と統制であり、次なる段階を前もって創出しようとする管理資本主義なのである。・・・その他 (編者)

I—(3)—1～19

オストロ・マルキストなど

1 マルクス・・・哲学・・・共通の土壌・・・

天国、悲しみの中のこの側面、バイブルのような正しさはまさしく僅少であるとしても。

ロシアでの参画・・・だがアメリカでの復活(ルネサンス)はとりわけ注目に値する！

ネオマルキスト達、ステルンベルグ(ベルンスタイン！もまた)・・・宗教、諸目的。予言・祝福の教義・・・社会情勢に対する根拠付けは論点ではない。最近の状況ととりわけ解明の図式・・・しかし宗教がまたもや発展に対する困難・・・相克、すなわち科学的発展・・・

ブルジョワ経済、今日のブルジョワ系経済学者・・・似合わないブーツの一足・・・(?)・・・高位の人がゆっくりとモスクワからの指令を受け取る・・・卑劣・・・神についてスピーチする・・・科学者達・・・

ネオマルキスト達(新マルクス学派)・・・それについてのそれぞれの見解の表明を(イギリスで！リカード)・・・

誰もがマルキストになれる、且つ利子を安くする・・・彼の文化的立脚点、共産党宣言・・・保守的な判断！自由貿易についての屈折した行論・・・帝国主義、ネオマルキスト・・・収奪者の収奪・・・ランゲと彼の論文に關説・・・私はその矛盾にみちた評価に対して他の一例を与える。

2 このようにして全ての要素をその中に見通すことになる！・・・そして経済的歴史観は部分をよく指示する——独裁に即しても・・・偉大であるのはその正しいヴィジョンである。資本主義の総崩壊・・・リカードの観察律・・・

3 搾取について数量が等しくなることはすでに述べた。・・・
決して変えられない。それでも何故にそれほど魅力的であるのか。・・・
だがそういったことは何でもない。真に動的なものがある。・・・
帝国主義——ナチズム・・・
不可避性——だがこれについては経済学と諸与件によって論証が必要。・・・不可避であるとは何を意味しているのか。・・・社会的—心理的契機・・・

4 出発点・・・諸与件・・・そこにはそれが全てを提供するところのものがある。・・・帝国主義・・・利潤をめぐる闘争・・・

5 利潤率低下の法則・・・
究極の勝利——科学的社会主義、しかしすでに述べられたこと、だが尚それにつき論証することに回帰する。・・・恐らくはヒットラーリズムにも・・・

6 マルクス・・・失業・・・
与件と操作可能な変数の問題・・・諸方法、諸要素、制度——とりわけ私的資産の——、合理性・・・資本は一つの与件である！ 子供の寓話・・・
人口は与件ではない・・・生産関数
発展の理論、ミルを見よ・・・蓄積は産出と増加の関数であり、利子の関数ではない。・・・
人々は機械のように生産されることはない、という議論に直面した時、マルクスは労働節約的方法を、剰余価値が——例えば労働時間の短縮といったことによって——切り下げられる場合の代償である量に対する「必要な圧迫」として、把握するのである。しかしそれは平均利潤率の実現を妨げることになるのでは。・・・生産方法の変化・・・高賃金＝低利潤・・・
資本主義は利潤なしには生きられない。・・・

諸与件、すなわち変化しつつある「他に同じならば」(“*ceteris paribus*”)

・・・労働節約は単に利潤をもたらす形態である。だがそれはゆがんでいる。・・・利潤の保護、結合、国家保証の行使、帝国主義、独占主義・・・戦争

7 如何に反社会的か！・・・

労働者と農業者の利害関係はどんなビジネスグループ——少なくとも常に何かを給付することを義務付けられているようなグループ——に対してよりも悪い。・・・そして「労働」が一職業を給養することは反社会主義的である。・・・マルクス主義者は広く言って古典派経済学の古参と共にある。

8 金融資本論は尚重要！！・・・

ネオマルキスト達一般の仕事は今日それについてなされた業績の最上のものである。・・・最近の学的ストックとしての帝国主義論・・・

一個の誤ったヴィジョン・・・階級理論についてのノート(現存する諸階級と理論の誤りについての我々の視角)・・・我々の眼からは解決されていない。・・・オルレアンのフィリップ・・・

9 1)搾取、2)低落していく利潤率・・・

恐らくは異なるものとされた諸理論についての関説と批判よりも、それ以上の何かあるものと連携されている。・・・

コストは価値に比例的でない。・・・リード(Read)についての章句・・・与件変化が本質的・・・仮説としては充分！・・・マルクスはここでは技術的に問題外・・・そしてどの程度に等しくそれと同一化できるのか。・・・

「動態論」・・・利潤の防衛、大経営・・・集中、述べられる時はいずれも帝国主義をも・・・利潤とその保持をめぐる闘争・・・斬新なのはそのモデル・・・価格に由来するごたごたは本質的にマルクスのでない。・・・マルクス自身がそれを指摘し、それに基いている。・・・

与えられる総崩壊・・・資本家はその諸業績を歪める・・・ここでの「与件」は歴史把握と階級諸政策に合体する。

10 マルクスにおける費用価格・・・

科学の運命——魅力的なものとなるところが少なくない・・・だが素人に対してそうだ！・・・恐慌は資本主義が大群衆の上に投げつけるものでもあるが、同じ要因によって生起する・・・都合の良いものではない・・・というのは個々の問題と関連付けると更に苛烈となるものだから・・・マルキシズムとヒットラーリズム・・・

11 説明されている意味が何であることを警戒せよ・・・

批判に対する基礎を欠く・・・減数と被減数は疑わしいが、だがさほど誤ってはいない・・・均等な利潤率・・・そしてその場合、かくして困難が。理念、量、それに分配において・・・
今やその動態、というのは不可逆過程の分析用具なのだから・・・貯蓄についての蓄積の理念・・・窮乏化(合理的命題)・・・利潤を防衛しそれを制圧するための階級闘争、すなわち、労働時間の短縮問題、婦人及び児童労働問題、それに貨幣価値問題を補足・・・総崩壊(同じ原因による恐慌)・・・強制収容的恐慌論・・・唯物史観との結合、とりわけその第二命題との結合・・・

誤っているギラギラした偽のヴィジョン、プロレタリアの仕事を他の諸階級が行ってしまうという社会主義的政策(時局から、だが深い洞察で)・・・

若く且つ経験のない人達は、暗黒の中にある情景を自分で見出したかのように感じる。

金融資本論・・・ナショナリズムに関説・・・ヒルファデーディング、それにバウエル、アドラー、ルクセンブルグ、ステルンベルグ・・・ネオマルキスト達、帝国主義論・・・集団規律を保つための闘争！・・・社会主義の不可避性——解決・・・しかし誰が知る。

誤りを正すならば魅力は消え去る。・・・ブルジョワ経済学者の嘲笑・・・それは何か？ かくして3、では動態論を、それらは若い人達に与えられるものではないという反論が、そこでVを。・・・そうしたものがマルクス経済学である。何故にそれはかくも多大に魅力的なのか、とりわけ・・・より広い含意。

彼は現実によくを語っているのか？ 部分的にはみせかけだけでしかない。大部分には現実にそうなのか——我々は分割できる所だけしか告げられない。・・・現実に常に遭遇する場において線や面積のような標準尺度がない。・・・だからマルクスは我々の資本理論によって打ちのめされる。・・・どこまでが自動的に(二つの命題)に・・・

帝国主義——一つの政策・・・ネオマルクス主義者達・・・社会主義的戦術家・・・不可避性

12 若い人々はうっとりとする。・・・社会主義を基礎付けること・・・そうした芳気がある。・・・議論の性質・・・魅力・・・我々はマルキストになり得るか？

マルクス主義者の政策と革命・・・進化と革命・・・自動展開説・・・経済的歴史把握と諸階級の導入・・・但し階級闘争はその場所に次々と見出されるものであるとしても。・・・例えば国民間の闘争・・・ネオマルキスト達・・・帝国主義・・・アインシュタイン——ドイツ・・・一般性があり、しかも尚、具体性を保つ、但し理論の中でさえ同じ。・・・ピグーとケインズ・・・ウェブレン・・・

中枢の存在・・・イタリアとフランスにおけるロシアとドイツ・・・階級的混乱主義者は自由を渴望する。・・・金を出すものは優しさを身につける。・・・このことは社会主義が民主主義であり得ないということの意味するものではない。・・・プログラムを欠くという激しい流儀、すなわち無批判の信条。・・・

それぞれの文化・・・可鍛性(柔軟につくられ得ること)。

13 実際どんなわけでマルクス主義の歴史が？・・・ネオマルキスト、ステルンベルグ・・・神聖な利子の確からしさ・・・何事からの救済・・・システムの一体性、一体性などはない。・・・時間モデル・・・余計なもの・・・弟子・・・リカード教授・・・リカードとケネー・・・

社会主義の疑問は経済的なものではない——そうとは言え、そのわめき声と喧伝はマルキストが一言あってしかるべきものである。・・・尚、他の諸矛盾が・・・価値論の矛盾・・・貨幣論も弱い・・・搾取の性質・・・文化的ヴィジョン・・・科学的社会主義・・・

階級闘争の判断のための指導書、共産党宣言(マニフェスト)・・・哲学・・・ネオマルキスト達・・・帝国主義・・・

14 同様に「反作用の部分としての政治」については、すでにマルクス主義者の経済学のところでも述べた。もはや政治力学は——おおざっぱには経世家が強力か、または賢明であっても——決定をもたらさないし、諸努力の指揮者でもない。しかしそれでも、政治が分離して取り扱われることはできないような、及び「必要がないものがあるとすれば、それは政治力学だけだ」とは言えないような、そうした契機(**das Moment**)はない。・・・それでも尚、一個の与件であるところのものは、分析上の選択の一素材だと言うべきである。・・・更に最近10年間の解明について、すでに何かがある。マルクス主義は構造変化の分析を何もしていないのではあるが。・・・というのは、我々が後に検討するように、危機一般(失業、投資機会の欠如といったこと)にこそ対応して、これらの諸事実があるのだからである。それは70年代に似たところがありさえする。・・・

進化と革命は時の成熟の充分性の問題である！・・・均衡、そしてこれらのことは社会的浪費の多くの源泉・・・IとIIで帝国主義を・・・

1905年の革命についてはすでに・・・

15 ナポレオン——革命——アンシャンレジーム・・・
地位に就くことだけが要求される。・・・まだその日でないのなら、どの

ようにそうでないのか。・・・

「計画」と「統制」・・・オーストリー・マルキスト達・・・マルキシアンの狙いはそれ自身を伝播配達していくことの論証でなければならない、ということが政策のなかにある。・・・

何故にアメリカでは人々がもっと過激になり得ないのか。・・・ニューディールがなされてきた。・・・以前には過少に見積もられていた課税の諸方法・・・インフレーションが危険であるかないか、は必ずしも重要でない。・・・

完全雇用・・・投資・・・管理資本主義・・・

保護は困難を更に広げるような全てをすでに身につけている。・・・それがそうであるかは定かでない。

16 マルクスを解釈し直そうとする傾向・・・近代経済学と結合させるような方向において。・・・

ネオマルキシズム・・・魅力と科学・・・理論と歴史的結脈・・・
マルクスと自由貿易・・・第二命題・・・誤ったヴィジョン・・・
評価以前の理論・・・予言の悲劇・・・章句の諸事例に眼を。

17 我々は尚マルクス主義たり得るや？・・・

それはない。集中、金融資本、外国貿易論、賃金財、資本の構成、恐慌・・・ブルジョワ理論との比較・・・

18 マルクスによってヒントが与えられ、バウアー、ヒルファーディング、ルクセンブルグ、それにステルンベルグによって構築せられた興味ある教義の発展は、我々の最後のステップにスケッチされた資本主義の過程についての分析から導かれる。すなわち、貧困化した大衆は彼等が生産することができるだろう物を購入することができない、という事実を資本家達が見出した場合、並びに利潤率が——機械化によってそれを保持しよう

とするそれぞれの試みの後——急速に収縮しつつあることを見出した場合、彼等は他の市場乃至は投資の分野を侵略しようと試みる。全ての資本主義国で起こっているように、彼等は先ず保護領の至る所でこれを求めて絶叫する。そして同時に自分達を保護する事の出来ない国々へ出掛けて行き、母国の政府にこれらの諸国を植民地化してくれるようせきたてる。あるいは——もし、そうしたことができないとなると——これらの諸国に投資することによって経済的に征服する。「現存する前資本主義空間を通しての資本化」(“capitalizing through the existing precapitalist space”)である。競合し合っている彼等の諸国は衝突し、且つ非友好的な空気の下におかれるが、こうした諸国の内にある資本家達は全て、母国での利潤の縮減と過当競争の増大により、背後からそうするよう鞭打ちの拍車がかげられる。ここから民族主義的な態度と言ひ回しが生じ、ここから資本主義的戦争が生じる。これが社会主義者の帝国主義の理論であるが、帝国主義は資本主義的進化の最後の段階として自らを現わす。

この理論が評価しなければならないような——歴史上の、且つ現在の——事実の広がりや如何に幅広いものかは問うまでもない。この図式に適合したように見受けられる諸事実を研究する事、これこそ信徒たちに許されることなのである。検証の量の多さが注目される。しかしながら、もとより、我々がそれに導き上げられる諸段階に信頼をおかないのならば、検証の量の多さがこの教義を救うものではない。とりわけ、こうした事実関係に対して、もっとより良く適合する他の説明があるならば、そうである。疑わしい事例検証の長いリストの上に帝国主義論が加えられ、歴史の経済的解釈が干渉を加えてくる。実際、帝国主義の理論はその適用の技法の非常によい事例である。資本主義過程についての一大シンフォニーの全楽器構成はそれに依存する。そして社会主義がマルクスに従ってやってくる道程は「全ての社会構造がその中で次のそれを前もって作り出す道程」であることの最も良質で力強い開示なのである。

19 比肩し難い大胆さと見事さをもった「一撃」を理解するため、我々は彼の経済学と社会学の関係を規定しておかなければならない。歴史の経済的解釈の第二の命題が再度召喚される。この命題は自己展開していく経済機構の存在を自明の前提とし、そしてその経済過程と生産の諸条件は、それ自身を変化させていくだけでなく、我々が現実に観察する制度的上部

構造におけるその変化を強いるといったやり方で変化する、ということの論証によって正当化されなければならない。歴史の経済的解釈そのものの枠内では、そうした論証は提供され得ない。歴史的分析の為しうる全ては「一致ともっともらしさ」を大なり小なりの程度に確立することである。更に歴史的分析はより強力な媒介物によって補強されないならば、生産関数における変革はどのようにしてもたらされるか、並びにそれは社会の制度的型枠とそこに含まれる慣習、態度、意志をどのように形作るのか、を示すことはできない。これなくしてはかの命題は——そして、帰するところ、歴史そのものの経済理論は——実際のところ一個の仮説以外の何物でもないことになろう。これらの必要なものの全てを充たすもの、それが今、我々の眼前にある。マルクスの経済的教義の本体はこれらの諸設問に対する諸回答の集積以外の何物でもない。

マルクスに従って、経済システムが——どんな時にも接近しつつあるどんな均衡状態からも離れて——推進されること、並びにこのことを為さしめている——どんな経済外的な衝撃の助けをも必要としないような——「ある作用力」があるということ、これらのことの含蓄を今や我々は知っている。更に我々はこの経済的変化がどのように社会的変化を強いたか、社会的諸階層(諸階級)——諸制度と諸態度の担い手であったもの——を創出し、高揚させ、沈滞させ、破壊することで、及びどのように彼等を「客観的」諸利益の敵対者を意味するような状況に置くことでそうさせたか、を知る。このようにして経済的過程は自らの制度的与件を変化させる。マルクスの経済学とマルクスの社会学の関係につき、前者が後者を補完すると答えられよう。社会学的説明がその道程を走り、そして実際に社会的進化の理論に生長する場合の歯車を、経済学的行論が提供するのである。このことは——組織的になされたものとしては——それ以前には試みられたことが決してなかった。マルクス以降では歴史学派によって部分的に試みられたにすぎない。

資本蓄積の機構を通して作動する企業間の競争的闘争を叙述している中で、マルクスは、より弱い競争者達は累進的に消し去られていく(“収奪されていく”)ので、個々の事業体の規模はそれぞれの分野でごく少数の巨大事業体だけが残されるところまで拡大される傾向を採る(“集中の理論”)、という命題を引き出している。一見して物事の継起過程について驚くほどによく検証されているかのように見えるこの命題は、ほとんどの人々に——敵対者をも含めて——大きく印象付けられた。

一連の疑問、マルクスの根拠付けは完全に正しかったのか、換言すればそうした集中への傾向が実際に彼の行論から導かれるが如くあったのか。それが立論通りであったのか、あるいは益々多くの成果を上げてきている近年の諸業績の光の下で改正されることが出来得たものであったのか。更にその検証はどの程度に本物であったのか。こうした設問には立ち入らないであろう。我々が与えたいのはそのタイプのどんな行論もがもつ説明力としての価値を展示せんがための行論の為され方についてである。

先ず「大企業の理論」をそれは我々にあてがう。それは正確に経済学の初心者、経済学のトレーニングを受けていない知識人が熱望するものである。彼等が経済学のいくつかの論文に眼を転じても、それを見出さないことになりがちで、かの悪魔的な大企業の諸政策は第二次的な場所に追いやられ、彼等には全く関心のない諸問題が長々と取り扱われているのを見出す。マルクスは彼等のために問題の事柄を大きく照らし出し、説明を与え、考えるべきことは何か、漠とした疑惑を変えるにはどんな方法があるのか、衝動的にもたれた嫌悪感はどのように正当化されるか、を語るのである。R・ヒルファァーディングの労作(金融資本論)はこのため高度金融の理論の補足を付け加えている。この補足は初学者には尚一層に多くの生き生きとした生活と現実のセンスを与えるものであったが、その傍ら、その種の内容は古い内容で且つ主題が魅力的であるだけであった職業的経済学者に対しては、尚更なる満足を与えることに失敗していた。

第二に、何故に生産関数が不断に革命化されるのかといったこと、並びにこれに付帯した諸階級を消滅させる過程——マルクスが根拠付けたのは諸階級という言い方においてであり、個々の事業体の不断の浮沈ではないというのでこう言う——が、その社会の意識構造をどのように変えるかといったこと、そうした事柄は、しかしながら、我々も直接検証しているのである。ブルジョワ的諸態度は、先ずは職人層のプロレタリア化、続いて小・中規模の工業家のプロレタリア化を伴って、消失していく傾向を採る。そして富裕であるということで人々を惹きつけてきた縮小しつつある一団は収奪によって平準化させられ、累進的にその真正の位置と利害を明らかにしている大衆と対面する。このようにして経済過程は社会的戦闘を闘うようもたれた軍隊を創出し、政治的情況を演出し、人々をしてあらゆる局面で——経済的な事柄だけではない——彼等が実際に行うよう考えさせ、且つ感じさせるのである、と。

このように我々がたった今授与しているものを授与することによって、これが一例であるようなタイプの行論が実際は「為そうと意図されたことを為す」ことに成功する、ということを読者は認めてくれるだろうと私は思う。

(4) その他 雑録

摘要

ベルンスタイン、ロードベルタス、エッジウォース、
マックス・ウェーバー、パレート、ランゲ等。
そしてレーニン主義とボルシェビズム・・・その他
(編者)

I—(4)—1～4

その他 雑録

1 マルクスの試験——アメリカ人のマルクス主義について、その新しい意図について・・・但しマルクスは統計的には何も主張しなかった、と思われる。

2 1) 社会心理学的問題、2) 実際的でない、3) 理論上の、4)・・・それ故にマルクスが依然として尚正当化されない、そうは言っても、というのを再度にわたって「観察」に言及してきた・・・
恐慌——総崩壊——流行、利点、新奇・・・
与件(前提)の変化と歴史観及び階級理論との総合作用は避け得ない・・・
資本家達の闘争、帝国主義、政治・・・

3 適当な場所に挿入・・・ 1) 心理的な問題とはかかわろうとしなかったことに対するマルクスの弁明・・・持続的タイプの人種問題といったもの 2) ベルンスタイン、適当な場所に、彼の行論についても、経済に対する非コミュニストの論理(そして他の領域ではなく?)、 3) 通俗的な概念の純化を主張する、そうすることで感情を入れずにおく、との説明・・・ナンセンス・・・ 4) 小市民の問題でもなく、労働組合の問題でもない、5) 関説、ロードベルタス、社会的であると同時に経済的であるカテゴリー、 5) —a) 低落する利潤率、6) 資本構成、それに廃棄資本に付される余剰のないこと、7) 搾取に対する可能な限りの正当化について・・・リカルド——の観察律・・・ 5) a～7)、構図への方向付け・・・ 8) 時間モデルと資本といったこと、その都度登場してくる範疇がどんなものであろうと、それぞれの歩みが誤りであるにもかかわらず・・・ 9) 社会主義者の予言の実質的基礎・・・社会主義者の可能性と社会主義者の文化、構図は疾感とブルジョワジーの譲歩がもたらすものによって整えられる・・・私の提案・・・社会主義者が言い立てることと言い得ないこと・・・壮大な見世物、トラスト、収用・・・終わり・・・

4 引用と解説が必要なのではないか。・・・一番手に「エッジウォース」(“Edgeworth”)、二番手に「マックス・ウェーバー」(“Max Weber”)、三番手に「パレート」(“Pareto”)(p 1 2)・・・p 1 4はもっと後、という成り行きになる・・・、四番手にベルンスタイン(Bernstein) p 1 4—修正主義— p 2 2迄はおおむね適当、但し p 1 5、1 6、1 7は再検討の必要が・・・ランゲ(Lange)についての体系的な配慮—と反論—は？・・・

レーニン主義は、あらゆるヴィジョンを床に投げつける。・・・粗雑な理論・・・社会主義へ向かっての発展・・・経済外的与件の作用と反作用・・・経済的な歴史把握とボルシェヴィズム・・・